

塙 保己一を診療した桐淵眼科とその眼科医一族



(1)



(2)

1 はじめに

この家は藤岡多野医師会現会長高山熙先生の曾ての医院である。立派な門は群馬県の文化財に指定されてしまい、壊すに壊せない大変な代物である。藤岡多野医師会の前身、多野郡医師会（明治40年）の会長鈴木伊之吉先生が師の桐淵医院の後をお借りしてだか、譲り受けてだかして開業して盛り、一時、書生が十数人おった（書生の一人、^{アライ}新居五郎は前全国土木建築国保理事長になったが、^{オバタ}小幡藩や七日市藩で漢籍や詩歌の師待遇の新居守村の曾孫である）。^{モリムラ}組合をつくり、その桐淵先生と鈴木伊之吉先生の間種村逸作先生（後述）が、桐淵医院の後をお借りしていたかどうか、を調べているうちに桐淵一族のことで今迄知らなかったことが色々分ってきた。

「群馬の医史」の江戸時代の項には【藤岡・業・医・桐淵貞寿】とだけあり、^{れてい}「多野藤岡地方誌」には桐淵貞山について約8行の記述があり、「医を学ぶかたわら俳諧を好み、20（60の誤り?）才の時、家業を幸助（註・貞賀）に譲り俳諧に精進するため藤岡へ移転した。……」とあるだ医業歴については殆ど不詳である。墓地が藤岡の町内の龍源寺なので墓誌調査を^{けて、}始めて、^{けて、}始めて臆げながらも輪郭が浮かび上がってきた。

路
2 江戸時代の産業流通上の藤岡と北甘楽の小幡国峰城主

藤岡は西に長野県（信州）、西北に新潟県（越後）、そして西南に山梨県（甲州）東南に埼玉県（武州）があり、藤岡には山内上杉の平井城がある。越後上杉と甲州武田、そして小田原北条の関東（武蔵）の出城（鉢形城）が秩父の東南東40kmの寄居にある。

藤岡は商業地（日野絹や阿久原絹の集散。藤岡瓦の生産）であるが、西や北方面は各地方戦力攻防の繰り返し、興亡の地であった。江戸－熊谷－高崎－長野（中仙道）。江戸－高崎－新潟。江戸－川越－寄居－藤岡－富岡－下仁田－佐久（一部姫街道）。佐久－諏訪。佐久－甲府。また、青梅、八王子を経て江戸、鎌倉。或いは 秩父を経て甲府へと諸方へ通ずる表街道、裏街道のルートがあった。

あり
小幡国峰城は藤岡の西西南12kmに秩父の豪族の進出によるらしいが明確ではない。何代目かからの出に奥平家があり、「解体新書」翻訳の中心的人物、前野良沢の藩主豊前（大分県）中津藩主奥平昌鹿侯はこの家系である。

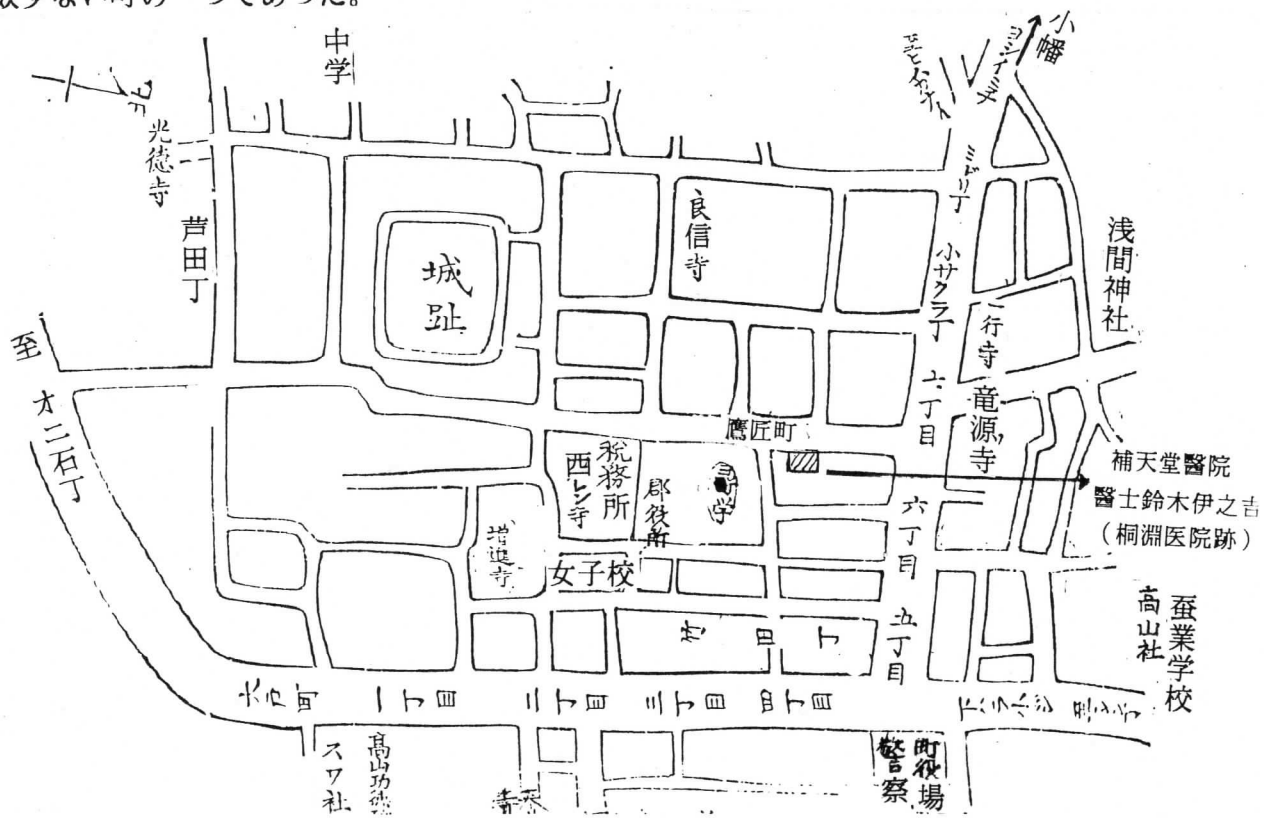
小幡城は天正末年（1590年頃）、小田原城を攻め落とした秀吉（前田、上杉軍）に攻略された。その後、織田信雄（元和）、松平一族（元禄）の領するところとなる。

一方、藤岡は武田遺臣の芦田一族が諏訪一円を拝領した後、藤岡と埼玉の一部を家康から加増され、芦田城を築城し、町造りをした。

桐淵医院のある所 は鷹匠町と言ひ、御巢鷹を管理育成していた鷹匠が住んでいた町並の中央にある。芦田城は廃城になり、町の宰領者は次々に替ったが、町は上州では殷振を極めていた数少ない町の一つであった。

藤岡町略圖

明治 37 年版



3 桐淵貞山とその祖

多野藤岡地方誌によると「桐淵家の先祖は甘楽郡国峰城主に仕え、天正末年（註1590年頃）桐淵馬之助（註右馬之助）利久のとき主家が亡び浪人の身になった。利久の女は越後高田城主徳川忠輝の家臣岡田義孝に嫁入りしたが、主君忠輝の没落で岡田氏も桐淵家に身を寄せた。^{ムスメ}（註1）寛文2年（1661・1662年）1男が生まれ利兵衛といった。（註。寛文12年1672年生の誤り？）利久の子定久は利兵衛を後嗣にすべく義孝に請い、利兵衛は定久の養子となった。これが後の貞山である。」とある。

残念ながら、これが間違いであった。推量の年代、年令の数字合せ、辻褄合せをしていたら、（門外不出とも言うべき）桐淵貞山家の過去帳の写しが入手出来た。貞山の実父岡田義孝が仕えた藩主は松平忠輝ではなくて、松平光長（註2）であった。越後騒動による光長除封が1681年（延宝9年元和元年）で、まさに貞山9～10才の時年代的にピッタリ符合する。

忠輝と光長の除封の年代差は実に約65年もある。

利兵衛、貞山は利発であったのであろう、桐淵家の養子に貰われるが、「家紋は岡田家の紋章【丸に隅立て四ツ目】を用いるが条件であった為、写真（2）の如く、高山医院に現存建物の棟屋根瓦の一部に見事な【丸に隅立て四ツ目】の家紋瓦が嵌め込まれている。（桐淵家の紋は【笹株に竹】富岡市七日市の桐淵家で確認）

○桐淵家の祖

桐淵若狭は小幡氏に仕え、上州北甘楽郡高瀬郷を賜わり桐淵村に住す。小幡氏没落の時所領七日市村（現富岡市）に退去し⇒慶長2年（1597年）桐淵右馬之助実行が生まれた⇒右馬之助実□⇒馬左衛門光年（18才まで七日市前田藩に仕えた）⇒右馬之助？と桐淵氏系譜考案でも、桐淵氏祖先考でも貞山の父岡田求女も養父桐淵右馬之助について不明確であることを匂わせてある。

本リポートは医師貞山以降の医師家系を述べるのが主題であるので小幡氏桐淵氏の先祖のことに関しては上述の程度の抄述に留める。

貞山は寛延2年(1749年)藤岡で病没し、藤岡の龍源寺に埋葬されたが、貞山が藤岡で何時から何時まで医業を営んでいて、何時から我が子幸助(貞賀)に藤岡での医業をやらせたか少しく不詳である。

(註1) 松平忠輝(1592~1683年)家康の六男。慶長10年(1605年)越後福島(直江津)と川中島合せて75万石を領し、同19年(1614年)越後高田に新城を築く。元和2年(1616年)即ち家康の没後に伊勢朝熊へ追放さる。以前武田家臣で後・家康の信任厚かった大久保長安(1613年死亡)の政敵、本多正信・正純の策謀によるとの説もある。寛永3年・信州諏訪へ追放。天和3年(1683年)諏訪にて死亡。

(註2) 松平光長(1615~1707)越後中將といわれた。

江戸時代初期越後高田藩主。結城秀康(のち松平姓に戻る)の孫。松平忠直の子。高田転封の時僅か10才の為、その後56年間藩政を老臣小栗正高、美作父子に委せた。築港、新田開発、殖産興業に成果があったが長い権勢を得た結果か、お家騒動所謂、越後騒動(1679年延宝7年から)1681年元和元年に城地を没収された。7年後に謹慎を解かれた。光長の養子宣富が1698(元禄11年)美作津山城主となった。

小栗美作⇒藩政に大功績を挙げたが(土木事業に河村瑞軒を招き、指導を受けた)越後騒動の責任を負わされ、將軍綱吉に切腹を命じられた。

(河出書房新社の日本歴史大辞典より)

4 桐淵家系譜

①桐淵貞山(即誉念空貞山居士)

名は利兵衛。茗丸舎と号す。

父は岡田求女義孝。

推算による生年は寛文12年(1672年)父と共に越後を立ち退いたとき年9才(1681年延宝9年?)なり。始めて桐淵氏を冒す。よって江戸に住し、軍学及び詩歌連俳を指南して名あり。初め岡田求女の病みて没せんとする時一子貞山を桐淵右馬之助に託す。右馬之助之を養って嗣となす。但し求馬(女)の希望により依然岡田氏の家章たる「四ツ目」の紋章を用うることになった。

桐淵氏元来の紋章は「笹株に竹」なりという。

貞山は寛延2年(1749年)9月18日に没す。享年78才。辞世 花もなし月も吾等も西へ行く。

②貞賀（教外祖伝居士）

通称・幸助。父は桐淵貞山。推算生年は元禄4年（1691年）。

初めて上野^{ミドノ}緑野郡藤岡町に住す。

宝歴9年（1759年）7月18日没。辞世 瓶の水吸ふ勢もなし翁くさ 貞賀

③安兵衛（豁開慈眼居士）諱未詳。生年月未詳。

初めて信州諏訪因幡守家中竹内新八に就いて眼科医となる（墓誌銘由緒書）。

安永5年（1776年）3月2日没。享年未詳。

④成章（瞎然了照居士）14才で初代新八不遠院の門下生。芦庵と号した。

文化13年（1816年）^{フルワ}閏8月22日没。瞎然了照居士と諡す。享年63才。

（推定生年は1754年宝暦4年）^{カツ}瞎は独眼又は盲目の意

⑤貞寿（嶺仙院文翁鹿太居士）諱は真龍字は子潜（推定生年は1777年安永6年）

天保7年（1836年）6月6日越後に遊歴中病没す。享年60才。

貞寿夫妻の間に男子なし、一女あり、道斎真利を養って嗣とす。

貞寿某年、津山松平家に帰参を請願す（由緒書）（註。越後高田の松平系）

辞世 閑古鳥いつまでないて〇〇〇〇〇鹿太

⑥道斎真利（源徳院文雄教道居士）幼名佐吉。

信州高島諏訪因幡守の家臣、高山左男路（左小路）の第三子なり。

推算生年文化元年（1814年）。天保4年（1833年）9月、20才の時、養家を相続す。

相続以前に竹内新八に師事す。安政2年12月再び津山藩松平家に帰参を請願した。翌3年

3月に召還され、これに臣事した。文久元年5月16日没。享年58才。

⑦道齋保利 天保5年～大正9年(1834～1920年)

幼名相馬。諱は明徴。

上州藤岡で生れ、弘化3年(1846年)14才の時から嘉永元年(1848年)まで、当時全国にその名を知られた、信州諏訪藩の御眼医師として、高禄で抱えられていた3代目竹内新八について眼科を学んだ。

信州の修業を終えて上州へ帰り藤岡の父(桐淵道齋藤真利)の許で嘉永元年～万延元年まで15年間医学に研業した。

文久2年(1862年)になって、志を立てて江戸へ出府し(30才)旧津山藩主に高禄で仕え、次第に都下で名声を博してきた。

明治4年(38才)になって、京橋北槇町(マキ)に眼科を開いたが、文字通り門前市(イチ)をなして流行した。東大のSchultzeやScribaなどの眼科を機会あるごとに見学し、河本教授(コウモト)にも師事した。

明治30年、日眼学会の創立されたときには、その世話人となった。

大正9年9月17日、心臓衰弱にて、87才の生涯を終えた。

郷里、藤岡町竜源寺に葬られた。法名・天寿院保利道齋居士。

○仙台の眼科医・平沢正二郎氏談「平沢正朔が明治の始め道齋先生に書生採用された。館林の殿様(元貴族院議長徳川家達公のお父上)が7年目していたのを治してあげて名を馳せた。老人性白内障を手術したのだろう。揆下鍼(註・水晶体を脱臼さす針)という細い銀の針を使って行ったものらしい。桐の箱におさまっているのを見たことがある。

先生は大正9年10月17日86才(大正9年9月17日没87才)の天寿を全うされた。お葬式にはオヤジ(正朔)がかけつけた。」(「わが銀海のパイオニア」より)

⑧森樹

⑨槇一(明治44年3月12日生。昭和10年日本医大卒。三菱重工東京病院副院長、後開業)

⑩利次(昭和45年日本医大卒。帝京大学附属病院眼科助教授1989年現在)

⑪桐淵光齋(盈利)天保7年—明治28年9月15日(1836～1895)

桐淵眼科の創始者道齋の実弟である。大学東校出で、眼科を修め、のち下谷練堀町に私塾揆雲堂を開き、眼科の診療と、医師の教育に力を尽くした。桐淵眼科の名は、既にその頃都下に知れ渡ったが、養子桐淵鏡次の代になってその名声は一段と喧伝された。

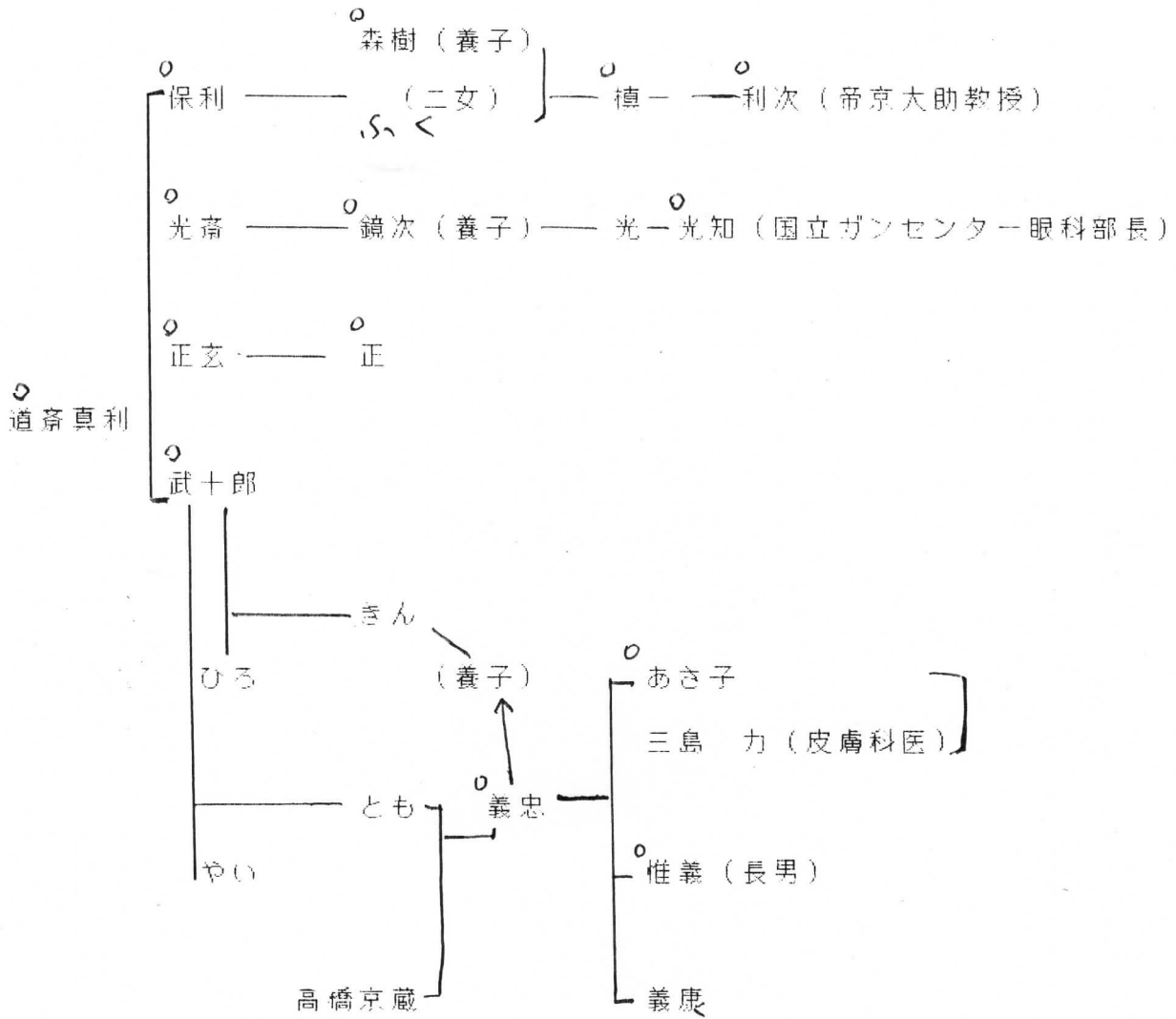
(東大出)



6 桐淵眼科

桐淵眼科一門の系譜

○印は眼科医



7 塙 保己一の眼病と桐淵眼科医

昭和7年(1932年)6月25日発行。温故叢誌(渋谷区東2-9-1温故学会)の「眼科学上より見たる塙^{ハナワケンギョウ}檢校」(医学博士 松本保三)に「187年前、延享3年の5月5日、3才の時、不図したことから【脾疝】(註参照)という病気に罹った。この病気はお腹の病気であって、いくら食べてもお腹が空いて、腹ばかりふくれて身体が骨と皮ばかりに痩せてしまう病気であります。両親は大そう心配して種々に手当を加えましたが却々恢復せず、その中に眼まで悪くなったというので非常に心を痛め、当時保木野(保己一の生地)から1里ばかり隔った上州の藤岡町に桐淵という眼科医があったのでそこへ毎日母親が背負って治療を受けに行きました。しかし眼の方も却々治らず、根気宜しく3年通った挙句遂に全快は難しいと匙を投げられてしまいました。併し落胆する一方、万一を頼みにして神信心をしながら尚その眼科医へ通って居りました。すると或る日のこと、医者からの帰途、背中の寅之助が急に痛い痛いと言き出したので路傍へおろしてみると、こは如何に、寅之助の両眼は潰れてしまって居りました。これ以来寅之助は全く失明してしまつたのであります。両親は寅之助が斯くも不幸なのはその生まれた歳の星が性に合わぬ為であろうから2年ほどへらして辰年に生まれたことにして辰之助と改名したら宜しかろうという知辺の者の言葉を容れて辰之助と名を改めた。(以下略)

*保己一の眼を診たのは二代貞賀か三代安兵衛のどちらか、

○註 脾疝 (療原社 漢方用語大辞典より)

心、肝、肺、腎と脾の五疝の一つ。

疝積・食疝・肥疝とも言う。乳幼児食の不摂生により脾胃の虚損や栄養不良を起したものの。

疝は乾なり。痩せ衰えて津液が乾枯するのをいう。

現代医学の腺病質・神経質・小児結核が含まれる。

結核性腹膜炎と栄養不良によるビタミンA不足⇒角膜軟化症? だったか?

a) 桐淵右馬之助の生年はともかくとして、没年が実は明確でない。寛永2年ということになっているが貞山が寛延2年で祥月命日が共に9月18日である。何処かで転写ミスがあった可能性も否定できない。

貞山が寛延2年(1749年)没。行年78才から逆算すると生年は1672年寛文12年で、この推算は他の方々もしている。

b) 「1721年の享保6年に家督を譲り、芭蕉門の其角や嵐雪と俳諧を拵め……」とあるが、其角(1707年)、嵐雪(1707年)は既に死亡している。従って、俳諧の2先輩等と俳諧活動をしていたのは当然1721年よりもっと前で、家督を譲った時点とは全く別な時であったかもしれない。即ち20才の貞賀幸助に家督を譲ったということか?。しかし、この年貞賀幸助は30才位。

以上2点だけでも疑問であったが、貞山没年・寛延2年・行年78才を基準にせざるを得ないであろう。

c) 塙 保己一を診療した眼科医は

保己一の生年は寅年を辰年に2年遅らせたことになっているが、延享3年(1746年)が寅年であるから、成章(1753年生推定)は生れていない。

安兵衛は安永5年没とだけの記録で、あとのことは不詳である。この時代の結婚する年令を19才から25才(医業を継ぐ長男の修業年を考慮して)とすると、生年不詳の安兵衛は父貞賀と子成章の生年から類推できる。(4通りの数が出るが止むを得ない。) 貞賀(生1691年~没1759年) 成章(生1753年?~没1816年)、従って安兵衛の生年は(貞賀生1691+19、又は1691+25=1710又は1716)又は(成章生1753-25、又は1753-19=1728又は1734)が推算される。安兵衛の生年は1710・1716・1728・1734年、従って保己一3才の1748年には貞賀は58才、安兵衛は15・21・33・39才となる。安兵衛が信州の竹内新八先生の許で修業、帰郷後25才くらいで結婚して成章を得たとして、安兵衛の生年を1748年頃とすれば未だ20才にしか過ぎない。蠟燭と灯油による採光時代の55才のベテランよりも28才前後の新進気鋭の安兵衛が保己一を診た可能性を大とするには安兵衛の生年を1722年頃、即ち貞賀31才前後の時の子(安兵衛)と想定せざるを得ない。希望的想像をすれば55才前後の父、貞賀と若い安兵衛の2人で保己一を診療したのであろう。謎であり、今後の解明の要がある。

稿を終るにあたり関係各位の御協力を感謝し御礼を申し上げます。

年表

- 天正末 (1590) 小幡藩、秀吉軍の前田、上杉軍に攻略さる
- 慶長3 (1598) 豊臣秀吉死去
- 慶長5 (1600) 関ヶ原の戦
- 8 (1603) 徳川家康将軍位に就く
- 9 (1604) 家光 生
- 10 (1605) 秀忠二代将軍位に就く
- 元和1 (1615) 大阪夏の陣
- 元和2 (1616) 家康 没。 忠輝 ^{アサマ}伊勢朝熊へ追放さる
- 寛永2 (1625) 桐淵右馬之助没
- 9 (1632) 秀忠没
- 寛永19 (1642) 関 孝和 (^{シロヤシキ}芦田, 城屋敷に生。芦田五十騎の内山家⇒関家へ養子
(和算の大家。高等数学「^{ハッピ}発微算法」の著。)
- 天保1 (1644) 松尾芭蕉 生
- 寛文1 (1661) 宝井其角 ^キ生
- 12 (1672) 桐淵貞山 生 芭蕉、熊沢蕃山 活躍
- 天和1 (1681) 延宝9年、越後高田藩主松平光長除封追放。上州沼田に礫茂左衛門。
- 3 (1683) 忠輝 諏訪にて没
- 元禄1 (1688) 柳沢吉保側用人政治の始まり
- 4 (1691) 桐淵貞賀幸助 生 (推定)
(元禄年間「眼目明鑑」「眼科医療手引草。藤井見隆著」あり)
- 7 (1694) 芭蕉 没
- 宝永3 (1706) 其角 没。吉保 大老になる。
- 4 (1707) 服部嵐雪 没
- 5 (1708) 岡田求女義孝 没。 算聖 関 孝和 没。
(江戸中期、馬島流眼科の他に竹内、井花、家見、石川、笠原、楠原、田原、東城の眼科専門医が夫々一家を成していた。)
- 6 (1709) 綱吉 没。貝原益軒の「大和本草」成る。
- 正徳4 (1713) 貝原益軒の「養生訓」成る
- 享保1 (1716) 吉宗八代将軍、享保の改革
- 6 (1721) 貞山、貞賀幸助に家督を譲る。(其角、嵐雪等と俳諧を拵めるとあるが
両者この時、既に没なり)
小石川薬草園の設立。目安箱の設置。
- 7 (1722) 小石川養生所設立
- 17 (1732) 享保の大飢饉

- 20 (1735) 青木昆陽「蕃薯考」を著す
- 延享3 (1746)(寅)塙 保己一 生
- 寛延2 (1749) 貞山 没 78才
- 宝暦3 (1753) 成章 生(推定)
- 7 (1757) 杉田玄白「西洋外科医学」を提唱
- 9 (1759) 貞賀 没。山脇東洋「蔵志」刊行。
- 明和8 (1771) 前野良沢、杉田玄白等小塚原で死体解剖見学
- 安永3 (1774) 「解体新書」刊行
- 5 (1776) 安兵衛 没。 秋山宣修「銀海試要」を撰す。
- 6 (1777) 貞寿 生
- 天明3 (1783) 浅間山噴火、天明の大飢饉。大槻玄沢「蘭学階梯」成る
- 寛政1 (1789) フランス革命。大槻玄沢「芝蘭堂」を開く。
- 2 (1790) 異学の禁
- 4 (1792) 宇田川玄随の「西洋内科選要」成る
- 5 (1793) 塙 保己一「和学講談所」を開く。
- 8 (1796) 稲村三伯「波留麻和解」を完成、最初の蘭日辞典。
- 享和1 (1801) 本居宣長が「古事記伝」を完成
- 3 (1803) 前野良沢 没
- 文化1 (1804) 桐淵道斎真利 生。華岡青州「通仙散」麻醉下にて乳癌手術成功。高野長英 生
- 2 (1805) 矢田部卿雲 生
- 11 (1814) 成章 没 63才
- 12 (1815) 杉田(立卿)錦腸がブレンキ「眼科新書」を訳述、梓行。
眼科訳語は、この時に選定されたものがその後も多く使われている
- 文政4 (1821) 塙 保己一 没 76才
- 6 (1823) シーボルト来朝
- 7 (1824) 鳴瀧塾と診療所
- 11 (1828) シーボルト事件。高 良斎・土生玄碩は西洋眼科の方術を修得。
宇田川玄真訳の「新訂和蘭薬鏡」出る
- 天保2 (1830) 寺門静軒「江戸繁昌記」出る
- 4 (1833) 道斎真利、家督を継ぐ 20才。ドゥーフ・ハルマ(長崎ハルマ)
出る。宇田川榕庵の「植物啓源」成る
- 5 (1834) 道斎保利 生
- 7 (1836) 貞寿 没 60才。宇田川榕庵「舎密開宗」成る
- 10 (1839) 蛮社の獄
- 弘化2 (1845) 矢田部卿雲「撒羅滿氏産論」翻訳・25才。高野長英逃亡(上州・中之条
より水上を経て上越国境から高田へ行く)

- 嘉永5 (1852) 大先輩・伊古田純道が本邦初の帝王截開術に成功
- 6 (1853) ペリー来航
- 安政1 (1854) 日米和親条約
- 4 (1857) ポンペ来日。矢田部卿雲 没 39才
- 5, 6年 安政の大獄。福沢諭吉・蘭学私塾を開く。吉田松陰死刑。
- 万延1 (1860) 桜田門外の変
- 文久1 (1861) 道斎真利 没 58才。皇女・和の宮・降嫁。蘭医ボードイン西洋眼科を指導す。
- 2 (1862) 道斎保利・江戸に出る。蕃所調所が洋書調所となる。
- 3 (1863) 鈴木伊之吉 生。薩英戦争。洋書調所が開成所となる。
- 元治1 (1864) 上州出身の新島襄アメリカに留学。四国連合下関(馬関)砲撃。
- 慶応3 (1867) 大政奉還
- 明治1 (1868) (慶応4年)

参考図書関係

- 「群馬の医史」「多野藤岡地方誌・総各論」「北甘楽郡誌」「桐淵氏系譜考」
- 「桐淵氏系譜附書」「桐淵氏祖先考」「桐淵道斎翁墓誌銘」「日本医学史綱要上下」
- 「年表【ぐんま】」「日本史小事典・文英堂」「わが銀海のパイオニア・宇山安夫」
- 「群馬縣營業便覽(明治37年版)」

御協力御芳名又は団体名

- 桐淵慎一氏(東京)
- 桐淵利得氏(東京)
- 龍源寺住職 勝 正道氏
- 小櫃田都夫氏(当医師会理事)
- 富岡市甘楽郡医師会様
- 富岡市高瀬公民館様 小幡資料館
- 当医師会事務局各位(事務長石原実以下4名)